

『論語』からの引用について、何よりもまず注目されることは、その全ての引用文において、一つたりとも不正確な『論語』（の章句の）理解や、あるいはそれに起因する不的確な引用がなかった、ということである。つまり言い換えれば、確かにいささか望文生義の嫌いがある一文もありはしたが、それは彼の独自の主張に引かれたまでのことであり、全体として、彼の『論語』理解は極めて正確であり、その正確な理解に基づいて、極めて的確な引用が行なわれていたのである。

その正確な引用は、多くの場合、和文（書き下し文）で、しかし又、かなりの割合で原漢文や、時に和漢混合文の形を取り、時に原文そのものと同一の文章として、あるいは、時にその内容を適宜まとめて摘録する形で行なわれていた。更に言えば、その引用たるや、ただ単に一つ一つの『論語』の原文を個々に引用するだけでなく、一つのまとまりを有する文章において複数の原文を組み合わせて引用してその脈絡全体を構成する、更に一つの引用文の中に複数の原文を織り込むなどして、正に自在闊達な筆致を見せるのであった。

要するに、琴溪は、『論語』の内容を熟読玩味して、その文章それぞれを、ほとんど暗唱するほどにまでなっていたのである。つまり、彼はそれを“自分のことば”にしてしまうほどに、『論語』の内容を広くかつ深く読み込んでいたのである。

琴溪の『論語』熟読は、決して所謂“儒者”のそれではない。つまり、彼は『論語』の内容に、儒教の教義や教説を求

めてはいない。ただ、おのが教養に資しているのに過ぎない。とは言え、それは既に彼の“ことば”になっている。言い換えれば、彼の思索の脈絡は、『論語』に由来するところの“ことば”によって構成され、展開されている。まことに、この『論語』一書こそは、琴溪の“思索の糸”だったのである。

（平成十五年十月例会）

\*\*\*\*\* 紹介 \*\*\*\*\*

川上 武 編著

### 『戦後日本病人史』

浩瀚な本書を一言で紹介するならば、病人・障害者の処遇の側からみた戦後医療史への問題提起といえる。今さら云うまでもなく、編著者、川上武氏は『日本の医者』（一九六一年）、『現代日本医療史』（一九六五年）の著書にみられる現状および歴史的分析を軸に、戦後日本医療に系統的な発言を続けてこられた。その著者が戦後医療史の重要な鍵の一つとして患者運動・医療告発運動に着眼、医療の当事者、病人の処遇が明らかにされていないのに思いついたり、新たな領域をきりひらかれたのが『現代日本病人史』（一九八二年）である。病人の処遇を規制する疾病及びこれに対処する医療技術の進歩と

同時に病人の社会経済的状况に眼を向けないかぎり、実相には迫れないとし、近代化の過程でわが国の患者が社会からどのように扱われてきたかを明るみにされた。同じ問題意識に立ち、現場の若手医師とともに研究会をつづけ、戦後の検討を加えられたのが本書である。

対症療法と自然治癒に依存せざるをえなかった戦前とはちがいに飛躍的な技術進歩がみられる。社会保障、医療システム、社会経済状態の進展もめざましい。病人や障害者のおかれた状況はその点で遙かに好転しているが、基底部分で差別が残り、所得の階層格差も姿を変えてあらわれている。さらに医療、社会、経済状態の進歩、成長は新たな事態を引き起こしている。このような複眼的視角にたち、第一部では広範な領域にわたり検証がすすめられている(第一章 戦争と病人、第二章 経済復興期の病人、第三章 高度経済成長から成人病の時代へ、第四章 リハビリテーション医療の登場、第五章 妊娠・出産と乳児死亡・未熟児の動向、第六章 戦後の女性のライフサイクルの変容、第七章 産業構造の変動と社会病、第八章 薬害・医原病の多発とその背景、第九章 「認定」と「補償」の責任論、第十章 精神障害者と「こころを病む」人びと、第十一章 重症心身障害児(者)の歩み 第十二章 寝たきり・痴呆老人の戦後史、第十三章 難病患者の苦悩と挑戦)。

第二部では、現在進行中の臓器移植、生殖革命、ゲノム革命、IT革命の技術論的分析がくわえられ、医療技術は今や

戦後第三の革新期に入ったとの提起がなされる。マイナス面のチェックに際しこれまでのように適用の仕方を問題にするだけでは解決つかず、医療技術そのものに倫理が内包されているところに特徴があるという。そのことが病人や障害者にとどのようなメリット、課題をもたらすかを検討しながら、新たな形で生死観の求められていることが指し示されている。

ところで、日常診療レベルで医療技術の持ち駒が格段に増え個々の局面での有効性は高まりながらも、全体としての臨床の水準は必ずしも高まっているとは言いがた、医療不信を招くことにもつながっていると感じるのは評者だけだろうか。しかもこれは単に専門技術・知識の普及だけでは解決つかず深刻な面をもっているように思う。

またシステムも形のうえでは整備されてきているが、表層的で根底での空洞化が進行していることはないのだろうか。著者は、医療システム、社会システムの満たすべき条件として、素朴な信条と断りながら、次の三点をあげておられる。①親のない子どもが世間なみの生活・教育を受けることが保障される、②子どものない夫婦や生涯単身者でも、老後を安心しておくことができる、③障害者や慢性の疾患のある病人が安心して治療を受け、人間らしい生活・仕事ができる。そこには生死観を社会保障及びその根底にある社会のあり方と切り離さない著者の姿勢がうかがわれる。一見精緻になつたようであるが、このような指摘と逆行するような改革論議がすすんでいるだけに、きわめて示唆的である。「ゲノ

ムの時代」、「ITの時代」に足を踏み入れた今日、技術の側からも、このような検討が急がれているのではあるまいか。

(上林 茂暢)

〔農山漁村文化協会、東京都港区赤坂七―六―一、電話〇三―三五八五―一四一、平成十四年三月二十五日、B五判、八〇四頁、本体一―四九二円〕

立川 昭二 著

『生と死の美術館』

本の表紙には、聖母マリアがイエスに乳をふくませているレオナルド・ダ・ヴィンチの、あの「リッタの聖母」が深いのある色調で写し取られている。その美しさと、なんとも言い様のない懐かしさ、それは自分が幼児であったころの思い出であったり、また妻が幼い子を育てていた風景であったりするのだが、そうした感情に押されるようにして本を手に取り、一気に読み終えてしまった。

「あとがき」によれば、本書は医療情報システム企業であるピー・エム・エル社の季刊誌『Vita』に、「美術作品をもとに人間の生死や医療の歩みをたどる内容」で、一九八九年から五〇回にわたって連載されたものがベースになっているという。「美術的遺産を美術史や美術批評とは異なる立場、つまり人間の生き死にの歴史や文化の証しとして考えてみよう」と

する立場」に立って、西洋編二十八、日本編二十六で構成されている。ちなみに前者は「古代ギリシャの奉納板」に始まって「ギリシャの壺絵」「ギリシャの墓碑」「エヒテルナツハ福音聖句集」へと続き、ベン・シャーンの「リルケ」「マルテの手記」より、ジャンセンの「老人と子供」、グランマア・モーゼスの「ドクター」で終わり、後者は興福寺の「阿修羅」に始まって「源氏物語絵巻」「病草紙」「みかえり阿弥陀如来」へと続き、路谷虹児の「胡蝶の夢」、三橋節子の「花折峠」、柄沢齊の「死と変容 旅」で終わっている。全五十四編のほとんどが豪華なカラー版であり、体裁が一編六頁の読み切りとなっているため、たいへん読み易い。

まず第一編のギリシャの神殿医療を表現した出土品では、同一画面に描かれた三人が実は同一人物の経時的な表現であると絵解きしたうえで、医神アスクレピオスへの信仰にもとづく医療の原理、すなわち現代社会から見失われてしまった癒しの文化が解き明かされる。同じギリシャの古代墓碑を扱った第三編では死者と生者とが、また夢と現実とが共在し、両世界間を自由に旅体験できたという当時のコスモロジー、死生観を読み解き、それらを排除してしまった現代の心の貧しさを指摘する。第九編は、ペストがもたらした救いのない恐怖と不安、死を前にした人間の執着と醜態を描いたプリュゲルの「死の勝利」である。これは人の愚かさとはかなさ、その熟視を通して生の充実を説く「メモント・モリ」の主題であったという。